

遺伝は大切な働きをしています。しかし、立派な両親から優れた子どもが生まれるわけではありません。脳は使うから発達するわけで、いくら遺伝的な要素がよくても、使わなければ脳は発達しません。

ただ、親が学者とか芸術家の場合、子どもも親と同じ道を歩くというケースが少なくありませんが、これは遺伝ではなく環境が影響しています。子どもは親の真似をしますから、その真似をするお手本が身近にあれば、親と同じような道をたどることが多いのです。

では、立派な能力を持っていない親ではダメかという、そんなことはありません。いい手本を示そうと努力すれば、それでいいのです。

子どもは生まれながらにして、自分の能力を使いたいという強い欲求を持っています。親のやることを見れば、すぐ真似をしようとします。ところが、そうした子どもの欲求にブレーキをかける親が多いのです。アレをやりなさい、コレも……と大方は干渉過多になっています。

親が教育に熱心なあまり、あれこれと指図すると、自分で積極的にやらない子どもになります。せっかくもって生まれた子どもの意欲をダメにしているのは親かもしれません。教育と称して干渉するあまり、かえって子どものやる気をなくしてしまっているのです。

そういう意味では、むしろ親が忙しくてまったく見てやれなければ、子どもはやりたいことを自由にやれますから、意欲が発達します。遊びでも何でも自分で考えたり、頭を使うから、頭の働きがよくなります。

幼児期くらい、自らやろうという意欲の強い時期はありません。赤ちゃんを見てください。歩けない赤ちゃんが歩こうとします。そのときの困難さは、われわれの想像を絶するものがあります。赤ちゃんにとって立って歩くということは、まだ不可能なことなので、それこそ何回倒れるかわかりません。それでも、諦めてしまう赤ちゃんは一人もいません。